

パネル

ジェンダー宗教学の確立に向けて

代表者 黒木 雅子
 コメンテータ 田中 雅一
 司会 小松加代子

ジェンダー宗教学の可能性

——現場と理論のはざまから——

川橋 範子

本発表は、ジェンダー宗教学とは何を指すのかに関する、概念や方法論の整理のための序論である。『ジェンダーで学ぶ宗教学』（田中雅一・川橋範子編、世界思想社、二〇〇七年）序章では、以下の点が強調された。宗教は、信念、儀礼、象徴などをおして、社会、文化、歴史的に形成され人々の間に流通してきた性別に関する知識や規範としてのジェンダーを形成し、それを人間を超えた存在の名の下に正当化し、また規範として正統化してきた。ジェンダーの視座をもつ宗教研究は、宗教における女性の周縁化と不可視化に批判の目を開かせ、男性中心主義が生み出した解釈や価値観を疑う批判的な視点を与える。ジェンダーは価値中立的な概念ではなく、性別にかかわる差別と権力構造を明示する批判的視座であり、ジェンダーの視点を批判的に用いることで、宗教の中に存在する差別と権力の問題が照らし出される。さらに、ジェンダー宗教学は、家父長

制批判に基づく宗教解体作業のみに従事するのではなく、宗教に新しい意味を付加し再生させることをめざしている。

また、「ジェンダーの視点」は単なる「女性の視点」と同義ではない。ジェンダーは、人種や民族や階級や性的指向など、アイデンティティの多様性を包括できるような概念へと拡大されてきた。ジェンダーとは、単一的な「女性の視点」をこえて、さまざまな差別と抑圧の経験の中の差異に敏感な視点を意味する。しかし、宗教とジェンダーの間に不幸な関係が存在することは、ウルスラ・キングが、「ダブル・ブラインドネス（二重の盲目性）」という言葉によって、表わしている。つまり、ほとんどすべてのジェンダー研究が宗教に対して目を閉ざし無関心であるのと同様に、ほとんどの宗教研究はジェンダーを度外視し、その重要性を見ていない。ジェンダーの視座と宗教研究とが二律背反であるという見方は、宗教を男性中心主義の砦のなかに追いやり、かえって魅力のないものにしてしまう。

このことは、欧米のフェミニスト宗教研究の中で、客観性の神話が生み出すジェンダーへの抵抗と捉えられている。宗教研究におけるジェンダーの視点の矮小化は、宗教研究における「客観性」あるいは「中立性」の問題と関わっている。そのため、欧米のみならず日本でも、学問的中立性を欠く「還元主義的な研究」と批判されることが多い。しかし、ジェンダーやフェミニズムの視点は、社会学や人類学ではもはや周辺化されているわけではない。ジェンダーの視点からの宗教研究は、女性固有の政治的な問題関心、あるいは学問的客観性や中立性を欠

く特殊な問題領域ではない。女性研究者やジェンダー研究の問題意識を軽視することなく、この重要性を次世代の研究者に説いていくことが必要といえる。

さらに、代表的なフェミニスト神学であるエリザベス・シュスラー・フィオレンツァは、研究者は二つのホームを持つべきであると述べている。これは、アカデミー内での議論と、現代の女性の政治社会的苦闘の両方に応答責任があることを研究者は自覚するべきだ、という意味である。研究者が排除されている人々を代弁するのではなく、その人々が語ることの出来る場を広げるように協働することは、フェミニスト人類学などフェミニストリサーチの基本理念である。研究者がどのような社会的特権を持つのか自らの立ち位置に向き合い、ともに解放を支える語りを形作っていくことが必要である。

イスラーム言説の利用と法識字

—— 女性説教師を事例として ——

嶺崎 寛子

本発表の目的は、イスラーム言説の利用におけるジェンダーについて、カイロと、カイロ近郊農村で活躍する二人の無名女性説教師とその勉強会を事例に、権威と法識字という概念を用いて検討することである。

近年エジプトでは、衛星放送等のメディアの発達、女性の識

字率向上等を背景に、イスラームが広い裾野を持つようになった。クルアーンやハディース（預言者の言行録で法規範となる）といった原典へアクセスできる層が増加した結果、イスラーム法の再解釈も積極的に行われている。女性の説教師やウラマーが出現、活躍する等、イスラームの知の体系の担い手も多様化しつつある。イスラームの知の体系および知の受容のあり方は、グローバル化や識字率の上昇等によって再編過程にあることは非常に重要である。マフムードが指摘するように、女性によるイスラーム言説は中でも周辺化されてきた「*Mah-mood 2005*」。しかしそれは、必ずしもマイナスの意味のみを持つのではない。

カイロの女性説教師とその勉強会参加者は、女性のみで閉じられた勉強会空間を逆にとり、そこでシャリーアの解釈変更をするなどして、「女性の、女性による、女性のための」イスラーム言説を創出していった。参加者たちが積極的に説教師と交渉できる勉強会という場は、彼女たちのイスラームにかかる法識字を育て、イスラーム言説の「カスタマイズ化」への道を開きつつあった。

カイロ近郊農村の女性説教師は、イスラームが女性に保証している権利について、勉強会を通じて啓蒙活動を行っていた。それは結果的に、日常レベルにおいて参加者たちが直面する様々な抑圧や生きにくさに対し、イスラームを資源として対抗する方法を授けることにもなっていた。彼女たちはイスラーム言説を創出するだけの法識字は持たないものの、イスラーム言説を用いて抑圧的な慣習と交渉し、自分たちを取り巻く身近な